

水稻用本田殺菌剤

速く効く! 長く効く! 葉いもちにも穂いもちにも効く!



ピロキロン剤

いもち病防除も
豆つぶの時代!



葉いもち



穂いもち



早く効く!長く効く! 葉いもちにも穂いもちにも効く!

コラトップ豆つぶの特長

葉いもち、穂いもちに安定した防除効果が長く持続します。

浸透移行性、速効性に優れるため、散布適期が幅広いです。

各種薬剤耐性いもち病菌に対して、安定した効果を示します。

拡散性に優れ、10アール当たり250グラムと軽量で
省力的な豆つぶ製剤です。

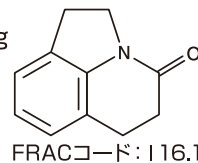
コラトップ豆つぶの有効成分と安全性

一般名:ピロキロン

〈有効成分〉 化学名:1, 2, 5, 6-テトラヒドロピロロ [3, 2, 1-ij] キノリン-4-オン
分子量:173.2 融点:112.1℃ 水溶解度:4.6×10³mg/L (25℃)
分配係数:logPow=1.6 (25℃) 蒸気圧:5.0×10⁻³Pa (25℃)

〈安全性〉 **急性毒性** 急性経口毒性:LD₅₀ (ラット) ♀ 300~2000mg/kg
急性経皮毒性:LD₅₀ (ラット) ♂♀>2000mg/kg

水生生物 コイLC₅₀ (96h) >85.3mg/L
ミジンコEC₅₀ (48h) >195mg/L
藻類ErC₅₀ (0-72h) >248mg/L

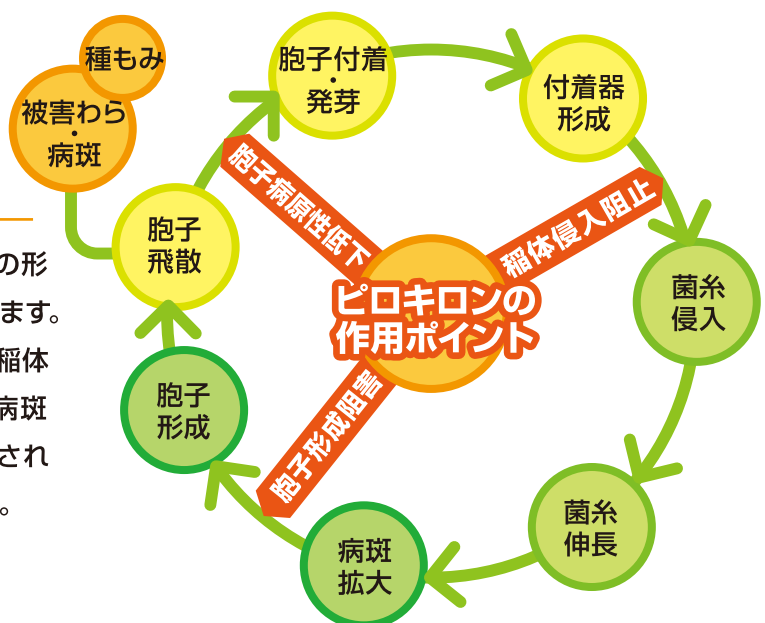


有効成分ピロキロンの作用性

ピロキロンの作用機構は、メラニン生合成阻害によるいもち病菌の侵入阻止や、菌の成育に対する阻害作用があります。

いもち病菌の 生活環 (ライフサイクル) における ピロキロンの阻害部位

いもち病菌は、孢子発芽→附着器形成→侵入糸の形成・侵入、という経過をたどり稲に感染していきます。この生活環のなかでピロキロンは、いもち病菌の稲体への侵入を阻止するとともに、形成されている病斑上の孢子形成を阻害します。また、孢子が形成されてもその病原性をも低下させる作用があります。



豆つぶ剤とは？

豆つぶ剤はクミアイ化学工業株式会社の特許技術
(特許番号3988842号)で作られた水面浮遊型の自己拡散剤です。



実物大

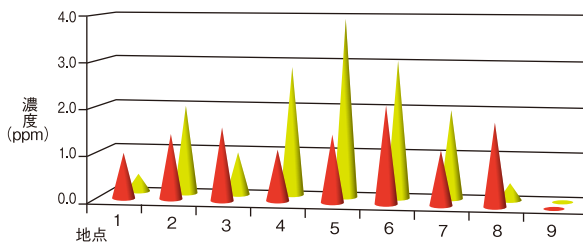
粒径約5mmの粒剤です。

- 田んぼに入らず、畦畔からの防除ができます(20アールまで)。
- 自己拡散性に優れるため、散布ムラの心配がありません。
- 10アール当たりの散布量が250グラムと軽量であり、省力的で簡便です。
- 散布方法も多様で、手まき・ひしゃく・動力散布機などで散布が可能です。

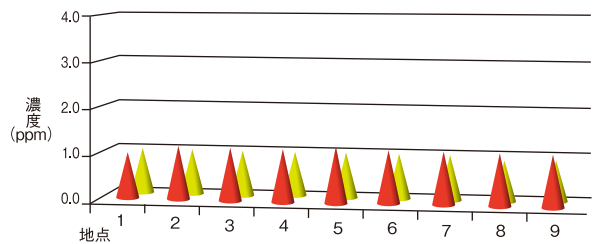
コラトップ豆つぶの拡散性

■コラトップ豆つぶ ■Eジャンボ剤

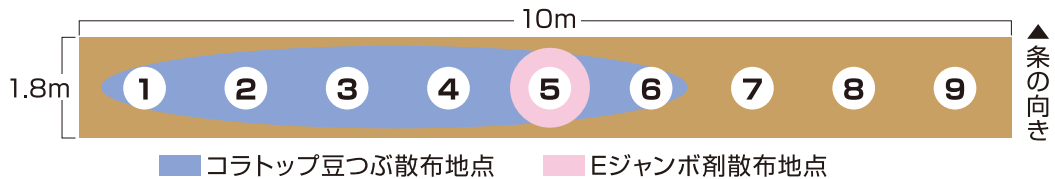
6時間後



2日後



試験場所:クミアイ化学工業研究所 区制:1区18㎡(1.8m×10m) 反復なし
水深:7~10cm 薬剤処理:出穂期(登録外) 散布:6時間後及び2日後に水中濃度を分析
処理量:コラトップ豆つぶ 4.5g(250g/10a相当)
Eジャンボ剤 9g(500g/10a相当)



散布2日後には全ての地点へ均一に広がった

豆つぶ剤の上手な使い方

1 水田圃場を湛水状態(水深5~7cm)にする。

豆つぶは田面水を介して拡散するため、田面が出ないようにします。

2 ゴム手袋およびマスクをして袋から薬剤をすくい取り畦畔から散布する。



手まき散布

おおよそ3~4mごとに1回、
畦畔から投げ入れます。



ひしゃく散布

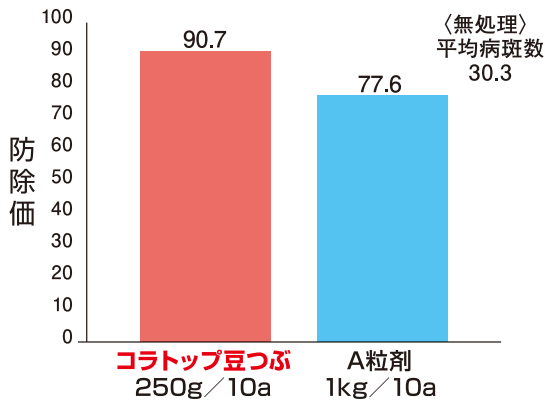
つり用のコマセひしゃくが最適です。
ひとすくい25gの場合、10a当たり
10回畦畔から投げ入れます。

ポイント

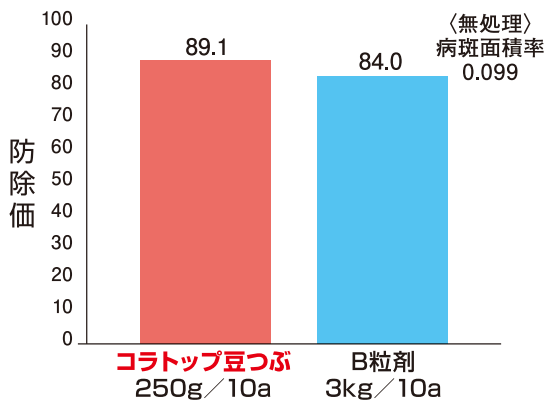
藻類、表層剥離、雑草が繁茂している場合には、有効成分の拡散が不均一になるおそれがあるため、圃場内に入って散布することをお勧めします。

コラトップ豆つぶの 防除効果

葉いもち



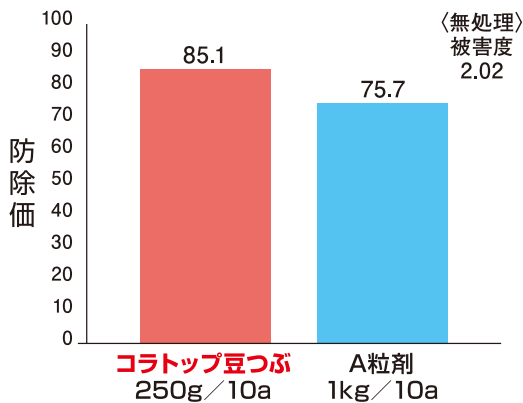
試験年度	平成26年
試験場所	岩手県農業研究センター
区制	1区100㎡ (4.5m×22.2m) 2連制
品種	ひとめぼれ
移植	5月15日
初発	7月1日
出穂	8月3日
薬剤処理	6月16日、7月18日
発病条件	多発生 (接種)
調査(7月29日)	各区50株の発病病斑数を調査



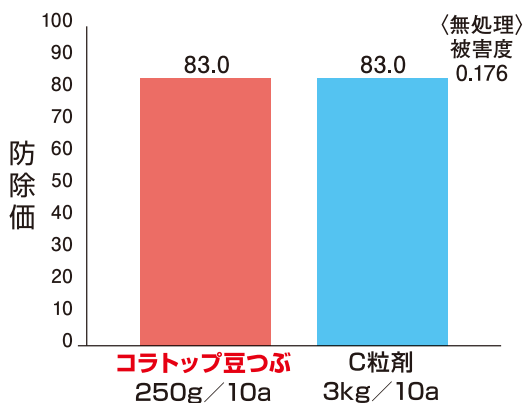
試験年度	平成28年
試験場所	クミアイ化学工業 (静岡)
区制	1区9.9㎡ (3.3m×3.0m) 3反復
品種	ひとめぼれ
移植	5月26日
初発	7月9日
出穂	8月9日
薬剤処理	6月29日 (初発10日前)
発病条件	少発生 (接種)
調査(8月5日)	各区30株を発病程度別に調査

葉いもちに対して高い防除効果が認められた

穂いもち



試験年度	平成27年
試験場所	福島県農業総合センター
区制	1区20㎡ (5.0m×4.0m) 3反復
品種	ひとめぼれ
移植	5月11日
初発	7月2日
出穂	8月1日
薬剤処理	7月17日 (出穂15日前)
発病条件	少発生 (接種)
調査(8月26日)	各区50株を発病程度別に調査



試験年度	平成28年
試験場所	クミアイ化学工業 (鹿児島)
区制	各8a (反復なし)
品種	ヒノヒカリ
移植	5月22日
初発	7月15日 (葉いもち)
出穂	8月15日
薬剤処理	8月5日 (出穂10日前)
発病条件	穂いもち中発生 (自然発生)
調査(9月24日)	各区25株を指数別に調査

穂いもちに対して高い防除効果が認められた

ピロキロンの稲体内への取り込み速度と分布

生育ステージ	処理量 (有効成分)	体内濃度 (ppm)		
		6時間後	3日後	
			茎葉部	穂部
4葉期	150g.a.i/10a	1.54	6.51	—
出穂期	200g.a.i/10a	—	13.02	2.41

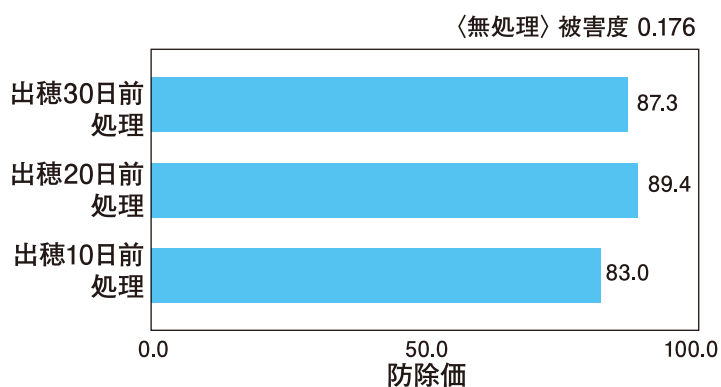
※コラトップ豆つぶの登録では120g.a.i/10a

試験方法 ピロキロン粒剤を4葉期および出穂期のイネに水面施用し、一定の時間を経過した後にイネ体吸収量を測定した。4葉期のイネでは薬剤処理6時間後にイネ全体にピロキロンが吸収移行し、出穂期のイネでは薬剤処理3日後に穂を含むイネ全体に吸収移行されることが確認された。

散布後、イネ体に速やかに吸収されるため、効果発現が早い

処理時期別の防除効果

試験年度	平成28年
試験場所	クミアイ化学工業社内試験(鹿児島)
区制	各8a(反復なし)
品種	ヒノヒカリ
初発	7月15日(葉いもち)
発生状況	穂いもち中発生(自然発生)
散布方法	200g(250g/10a相当)を周縁散布(5mおきに手散布)
調査(9月24日)	各区25株(250穂)を指数別に調査



穂いもちに対して、処理時期による効果差はなく、散布適期が幅広い

日植防委託試験成績(抜粋)

試験年度	作物名 栽培条件	病害虫名	実施機関	発生状況	処理日	対照薬剤名 (処理条件)	対対照	対無処理	判定	薬害
平成26年	稲 ひとめぼれ 移植日:5月15日 出穂:8月3日	いもち病(葉)	岩手(病虫)	多(接種)	6月16日/7月18日 〈7月16日/7月29日〉	A粒剤 1kg/10a	A	A	A	-
平成27年	稲 ひとめぼれ 移植日:5月15日 出穂:7月29日	いもち病(穂)	岩手(病虫)	中(接種)	7月20日 〈8月31日〉	A粒剤 1kg/10a	B	B	B	-
平成27年	稲 ササニシキ 移植日:5月18日 出穂:7月31日	いもち病(葉)	山形	葉少(接種)	6月29日(葉いもち初発時) 〈7月21日〉	D粒剤 1kg/10a	B	A	B	-
平成27年	稲 ひとめぼれ 移植日:5月11日 出穂:8月1日	いもち病(穂)	福島	少(接種)	7月17日(出穂約15日前) 〈8月26日〉	A粒剤 1kg/10a	A	A	B	-

水稲用本田殺菌剤



農林水産省登録 第23889号

有効成分：ピロキロン…48.0%

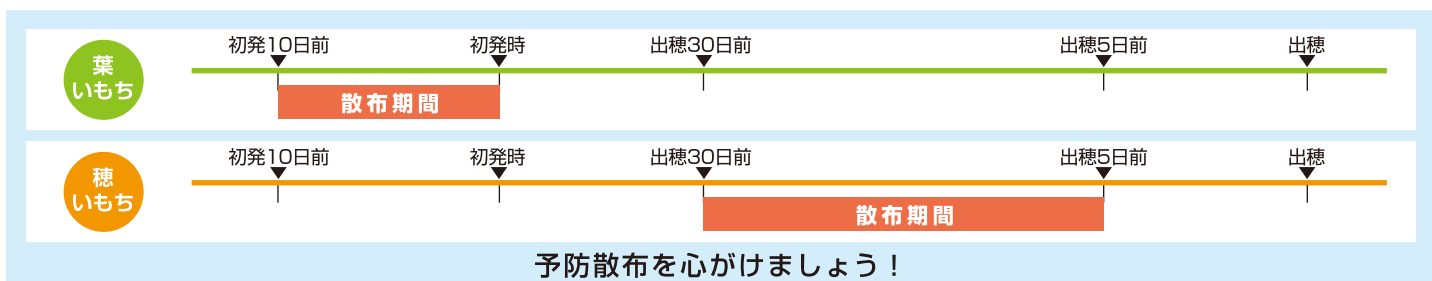
人畜毒性：普通物（毒物及び劇物取締法に非該当）

適用病害と使用方法

作物名	適用病害名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ピロキロンを含む農薬の総使用回数
稲	いもち病	250g/10a	葉いもちに対しては 初発10日前～初発時 穂いもちに対しては 出穂30日前～5日前まで	2回以内	散布	3回以内 (育苗箱散布は1回以内) 本田では2回以内

★上記以外には使用しない

上手な使い方



使用上の注意

- 散布に当たっては、湛水状態(水深3～5cm)で均一に散布し、特に、藻類、表層剥離などの水面浮遊物が多い場合は、拡散が不十分になるおそれがあるため、ていねいに散布してください。また、散布後少なくとも4～5日間は湛水状態を保ち、田面を露出させず、散布後7日間は落水およびかけ流しをしないでください。
- 本剤は吸湿性があるので、濡れた手で作業したり、降雨で濡れたりすることがないように注意してください。また、開封後は早めに使用してください。
- 本剤の使用に当たっては使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合には病虫害防除所等関係機関の指導を受けることをお勧めします。

安全使用上の注意

- 誤食などのないよう注意してください。誤って飲み込んだ場合には吐き出させ、直ちに医師の手当を受けてください。本剤使用中に身体に異常を感じた場合には直ちに医師の手当を受けてください。
- 本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意してください。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受けてください。
- 本剤は皮膚に対して弱い刺激性があるので皮膚に付着しないよう注意してください。付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落としてください。
- 散布の際は農薬用マスク、手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用してください。作業後は直ちに手足、顔などを石けんでよく洗い、洗眼・うがいをするとともに衣服を交換してください。
- 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯してください。
- かぶれやすい体質の人は取扱いに十分注意してください。

本資料は2017年4月現在の知見に基づき作成しています。

● 使用前にはラベルをよく読んでください。 ● ラベルの記載以外には使用しないでください。 ● 本剤は小児の手の届く所には置かないでください。 ● 防除日誌を記帳しましょう。